

【漢検漢字文化研究奨励賞】 優秀賞

「好」の字音とその単語家族¹—上古音研究と戦国楚地出土資料から—

早稲田大学大学院 文学研究科 博士後期課程2年 野原 将揮

はじめに

上古中国語を考察する際、一つの指標となる考え方に“単語家族”というものがある。音韻面から語彙を word family——すなわち単語家族——に分類するという Karlgren1933 の試み以降、単語家族の研究は上古中国語の研究を進める上で、最も有効な方法の一つと考えられている²。単語家族の研究について、服部四郎『日本語の系統』p. 31 は以下のように評している³：

シナ語のように曲用や活用のない言語間の親族関係を証明することが極度に困難であることが分かる。このような言語の比較研究には S. N. Wolfenden, B. Karlgren, W. Simon らの諸氏の試みているような「単語家族」(Word family 同じ語根を含む単語の群)の比較が効果的である。なぜならば、箇々の単語は容易に借用されるけれども、「単語家族」の借用は困難であり、殊にその家族の成員が異なりつつしかも語根が対応する場合には、親族関係のかなり有力な証拠とすることができる。

このように単語家族の研究は漢語の親族関係を明らかにするための有効な手段の一つと考えられる。Karlgrén 以降、単語家族の研究は海外だけでなく日本国内でも進められてきた。例えば藤堂明保 1965『漢字語源辞典』は上古中国語の音韻体系の枠組みを基に単語を分類し、核となる形態基とその語義を明らかにしたものである⁴。いま例を挙げると、藤堂明保 1965 : 488-491 には「支部・耕部 No. 129 青・井・晶 すみきっている」という項目があり、この項目には「青、清、淨、精、靚、請、静、淨、靖、情、晶、井、甞、晴、星、旌」等の語が含まれている。このグループに所属する語の音的特徴と語義を見てみると、いずれも同音或いは類音であり(中古：梗撰歯音、上古：耕部歯音の枠内に収まる)、いずれも「すみきっている」という共通の語義を有していることが明らかである(「淨」：清い水、「精」：すんだ米、「晴」：すんだ日、「晶」：すみきった光…等)。そこで藤堂明保 1965 はこの単語家族の音的特徴と語義を帰納して形態基 {TSENG} と基本義「すみきっている」を定めている。注目すべき点は、一つの単語家族に収められる語の字形が必ずしも一致しているわけではなく、全く異なる字形

1 本論文は野原将揮 2008 : 243-256 を修正したものである。

2 Karlgren1933 はシナ・チベット祖語の再構を進める前に、各言語内部に於いて単語家族の研究を進めるべきであると指摘している。

3 服部四郎 1959『日本語の系統』が初出だが、本稿は服部四郎 1999 年所収の論文を参照した。

4 形態基について、藤堂明保は「形態基はその配下に多くの形態素を擁する親概念であり、古代人の脳中に蓄えられていた単語家族の抽象的な一々の型であった。」としている。つまり形態素が抽象化された形と考えているようである。(本稿では藤堂明保 1987『藤堂明保中国語学論集』所収の論文「形態基という考え方」pp. 232-241 を参照した)。

の語も含まれている点である。例えば、上に挙げたグループには「青」「井」「晶」等の異なった声符を構成要素に持つ字が含まれている。これは凡そ8割が形声文字からなるという漢字とその言語を考える上で大変重要なことであって、漢字が他の文字と同様に二次的なもの——すなわち言語表記システム——であるということを認識させるものである⁵。字形の上では何ら関連性の無い語であっても音韻論的な解釈を加え、その原義を明らかにすると、実は同じ単語家族に所属する語と判断できるような例がしばしば見受けられる。

本稿で扱う「好」は伝世文献だけでなく、近年発見・公開が進む先秦の出土資料中にも多く現れる。また「好」の異体字と思われる「𠂔」も同様に伝世文献と出土資料中に多く見られる。本稿は最新の上古音研究の成果を踏まえ、「好」と「𠂔」の音韻的特徴（音の由来）とその語義、そして関連する単語家族について考察を加えることを目的とする。その中で「𠂔」が丑声の形声字であること、また「好」の字音が上古の鼻音 *n- に由来すること等を明らかにしたい。

1. 「好」と「𠂔」について

1-1. 「好」について

まずは「好」について考察を加えていきたい。「好」について、「五経無双、許叔重」と謳われた許慎は『説文解字』で以下のように解釈している：

『説文解字』：「美也。从女子。」

段玉裁は『説文解字注』で以下のように解釈する：

『説文解字注』：「媿也。各本作美也。今正与上文媿為轉注也。好本謂女子引伸為凡美之称。凡物之好惡引伸為人情之好惡。本無二音而俗強別其音。从女子。（会意。呼皓切。古音在三部。）」

いずれも「从女子」として、「好」を会意字と見做している。この点に関する異論は皆無に等しい。もちろん日本に於ける研究者も同様に「好」を会意字と見做している。いま藤堂明保 1965『漢字語源辞典』、白川静 1984『字統』を見ると、それぞれ次のように解釈している：

藤堂明保『漢字語源辞典』：

「女+子（こども）」の会意字で、女性が子供を大切にかばってかわいがるさまを示す。だいじにしてかわいがる意を含む。

5 言語表記システム（漢字）と言語の関係については大西克也 2009：1-3を参照されたい。

白川静『字統』:

会意……ト文に女を母の形に作り、あるいは子を抱く形に作るものがある、婦人がその子女を愛好することを示す字である。

藤堂明保・白川静両氏が共に「好」を会意字と見做し「女性が子を抱く、大事にする」というイメージ・語義を抽出していることが分かる。両氏の漢字に対するアプローチの方法は——前者が音韻論的な考察を軸とし、後者が呪術的な考察を中心とするように——それぞれ大きく異なるものの、「好」に関する見解に相違が見られないということは注目に値する。このようにしてみると、「好」を会意字と認めて相違ないと思われる。実際のところ、「好」を形声文字と認めることは大変困難である。いま仮に「好」を「女声」の形声文字と仮定しても、「女」は上古で泥母魚部であり、「好」は上古で曉母幽部であるから声母・韻母ともに大きく異なり、音韻論的な解釈は不可能である。参考としてBaxter1992の再構音を借りると「女」*nrjaʔ、「好」*xuʔとなる⁶。結局のところ「好」に関しては、これまで通り『説文』以来の会意字説に従うのが適当であると思われる。また「好」の原義については、藤堂・白川両氏が指摘するように「女性が子を抱く、大事にする」と考えるのが良いのではないだろうか。

1-2. 「好」について

1-2.1 伝世文献中に見える「好」

本項では「好」について見ていきたい。「好」はその性格上、『説文』の籀文あるいは古文に相当する文字と予想されるが、『説文』の中には見当たらない。ところが、さらに入念に探してみると「好」に似た字形の「𠂔」という字が『説文』古文ではなく、『説文』の正文として収められていることが分かる。いま『説文』の説解を見てみると以下のようにある:

『説文解字』: 𠂔、人姓也。从女丑声。商書曰、無有作𠂔。

『説文』によると、「𠂔」が「丑声」の形声字であることや『商書』に「無有作𠂔」とあるらしいということが分かる。この『商書』「無有作𠂔」に対応する今本『尚書』「洪範」では「無有作好」とあることから、「𠂔」は「好」を表していると予想することができよう。また同じく対応する『古文尚書』では「亡ナ作好」とあることから、『説文』に見える『商書』「𠂔」と『古文尚書』「好」の二字はいずれも「好」を表していると見て良いだろう⁷。以下の通りである:

- ・今本『尚書』:「無有作好」
- ・『説文解字』:「商書曰、無有作𠂔」

6 Sagart&Baxter2009: 221-244 等は中古三等韻に対応する上古音に *j- を認めず、咽頭化の有無を認めるという仮説を採るが、本稿では Baxter1992 の再構音を引用する。

7 『古文尚書』「好」については、羅振玉『雲窗叢刻』「隸古定古文尚書」巻七（民国三年景石印本 東洋文庫所蔵）を参照。

- ・『古文尚書』：「𠄎作𠄎」

実はこのような手続きを踏まなくとも「好」、「𠄎」、「𠄎」の三字の関係を明確に指摘した文献が幾つかある：

- ・『玉篇』：「𠄎、古文好字。」
「𠄎、呼道切、姓也。亦作𠄎。」
- ・『広韻』：「𠄎、人姓。」（上声「好」の小韻に含まれる）
「𠄎、姓也。或作𠄎。」（去声「好」の小韻に含まれる）
- ・『汗簡』：「𠄎、好。」（『古文四声韻』にも見える）
- ・『正字通』：「蓋𠄎即古文好。」

以上の例からも、「好」＝「𠄎」＝「𠄎」というように三字が同義——すなわち異体字の関係——であると考えて恐らく間違いないだろう。しかしながら、以上の例は全て伝世文献中の例であって、後世に手加えられた可能性を完全に払拭することはできない。したがって、次項では実際に出土した文献に見える「好」とそれに関連する文字を挙げ、その関係性を明らかにしたい。

1-2.2 戦国楚地出土文献中にみえる「𠄎」

前項では伝世文献に見える「好」とそれに関連する文字「𠄎」「𠄎」の二字を見てきたが、本項 1-2.2 では戦国楚地出土の資料に見える「好」と「𠄎」の状況を明確にしておきたい。

本稿で利用する出土資料は『荆門市郭店楚墓竹簡』、『上海博物館藏戦国楚竹書』に収められる「楚簡」と称される竹簡であり、紀元前 300 年頃の戦国中期楚地のものとされる（以下、『郭店楚簡』『上博楚簡』と略称）。その中には伝世文献に見られない内容を数多く含んでおり、歴史・思想・言語等の各方面から数多の注目を浴びている。この『郭店楚簡』と『上博楚簡』に「好」と「𠄎」が対応する例がしばしば見られる。以下の通りである（句読点は筆者が加えたもの。また括弧内の文字は通仮字を指す）：

- ＊本稿では今本『礼記・緇衣』との対応関係があるという利点を重視し『郭店楚簡』「緇衣」と『上博楚簡』「緇衣」の例を挙げる。より確実に文字隸定、解釋が可能になると考える。

◆例①

今本『礼記』「緇衣」：

子曰、「好賢如緇衣、惡惡如巷伯」

【訓読】

子曰く、「賢を好むこと緇衣の如く、悪を惡むこと巷伯の如くすれば…」

『郭店楚簡』「緇衣」第 1 号簡：「𠄎」

夫子曰、「好婦（美）女（如）好茲（緇）衣、亞（惡）＝女（如）亞（惡）遯（巷）白（伯）」

…」

【訓読】

夫曰く、「媿（美）を好むこと茲（緇）衣を好むが女（如）く、亞（悪）を亞（悪）むこと逴（巷）白（伯）を亞（悪）むが如くすれば…」

『上博楚簡（一）』「緇衣」第1号簡：「𠄎」

子曰、「𠄎（好）頰（美）女（如）𠄎（好）紂（緇）衣、亞（悪）■女（如）亞（悪）徧（巷）白（伯）…」

【訓読】

子曰く、「頰（美）を𠄎（好）むこと紂（緇）衣を𠄎（好）むが女（如）く、亞（悪）を亞（悪）むこと徧（巷）白（伯）を亞（悪）むが女（如）くすれば…」

*「𠄎」は『上博楚簡』だけでなく、『郭店楚簡』「語叢二」21号簡、22号簡にも見える。ただし「丑」の字形がやや異なる（『上博楚簡』「緇衣」：「𠄎」、『郭店楚簡』「語叢二」：「𠄎」）。

このように今本『礼記・緇衣』と『郭店楚簡』「緇衣」で「𠄎」好とある箇所が『上博楚簡』「緇衣」では「𠄎」好と表記されていることがわかる。ちなみに「𠄎」と「𠄎」は「子」の表記される位置が異なるけれども、このような例は出土資料中でしばしば見受けられる現象であるから、「𠄎」は「𠄎」と隸定して良いだろう（以下、「𠄎」とする）。以上のように、伝世文献に限らず出土文献中でも「𠄎」が「好」を表しているということからも、「𠄎」と「𠄎」の二字は「好」を意味している——すなわち異体字の関係にある——と見てまず間違いないだろう（「好」＝「𠄎」＝「𠄎」）。このように実際に出土した資料の中で「好」と「𠄎」が対応するというのは非常に説得力がある⁸。

次に出土資料を扱う研究者の見解を見ていきたい。例えば『上博楚簡』「緇衣」の整理者は次のように解釈している：

『上博楚簡』「緇衣」原注（整理者注）：

「𠄎」从丑从子，「好」古文。《汗簡》「好」作「𠄎」。「好」或又作「𠄎」，从丑从女。《尚書・洪範》「無有作好」，《說文》引「好」作「𠄎」。

このように『上博楚簡』「緇衣」の整理者は『汗簡』や『說文』を根拠として「𠄎」を「好」字に読んでいることが分かる。また「从丑从子」——つまり会意字——としている点にも注意されたい。一方、季旭昇2004：80は次のように解釈している：

季旭昇2004：80の解釈：

濬智案：張光裕先生主編、袁師合編《郭編》已將楚簡從「丑」從「子」之字釋作「好」，

8 馮勝君2007：65-67は『郭店楚簡』「語叢二」𠄎「𠄎」の偏旁「丑」は標準的な楚系の字形とし、『上博楚簡』『緇衣』に見える𠄎「𠄎」の「丑」は齊系の字形と見ている。

其説可從（《郭編》頁 147）。「丑」可能是聲符，「丑」古屬透紐幽部，「好」古屬曉紐幽部，韻同，聲稍遠。

季旭昇 2004 : 80 は透母幽部「丑」と曉母幽部「好」は声母を異にするが韻は同じであることを指摘し、その上で「丑」を「𠄎」の声符であると見做しているようである。つまり季旭昇 2004 は「𠄎」を「丑声」の形声文字と見ているのである。結論から言えば、本稿も季旭昇 2004 と同意見であるが、これを論証するためには上古音研究の立場から更なる検証が必要である。季旭昇 2004 の解釈のままでは声母が合わないため（「丑」中古徹母、「𠄎」中古曉母）、原則として「丑」を声符と見做すことはできない。以下、1-2.3 及び第 2 章で述べたい。

1-2.3 「𠄎」「𠄎」は会意字か、それとも丑声の形声字か

「𠄎」や「𠄎」は果たして会意字であろうか。それとも季旭昇 2004 : 80 が指摘するように「丑声」の形声文字であろうか。「好」字については、上述したように許慎以来の会意字説に従うのが妥当である。「好」と異体字の関係にあるというのだから「𠄎」や「𠄎」も会意字とする研究者もいるだろう（上に挙げた『上博楚簡』原注（整理者注）も恐らく会意字とみている）。

そこで再び「𠄎」の『説文』説解を見てみたい：

『説文解字』：𠄎、人姓也。从女丑声。商書曰、無有作𠄎。

このように『説文』は「𠄎」を「从女丑声」とし形声文字としていることが分かる（恐らく季旭昇 2004 もこれを拠り所の一つとして「𠄎」を「丑声」とする）。ではどのような音に読まれていたかという点、例えば『玉篇』には次のようにある：

『玉篇』：「𠄎、呼道切、姓也。亦作𠄎。」

『玉篇』には「𠄎」は「丑声」——すなわち形声文字——であり、反切は「呼道切」（豪韻上声曉母）とある⁹。また『説文』や『玉篇』には「𠄎」についての記載は見られないが、「𠄎」との関係性を考慮すれば「𠄎」もまた丑声の形声文字と認めて良いだろう。したがって、本稿では「好」を会意字と見做し、「𠄎」と「𠄎」については丑声の形声文字と見做すことにする。「好」と「𠄎」「𠄎」の二字は会意字と形声文字という違いこそあるが、伝世文献や出土資料の状況から見て、同音同義語であることは間違いないだろう（もちろん異体字と認めた時点で同音同義であることは明らかではある）。ただし、「𠄎」「𠄎」の二字を丑声の形声文字と認めるためには音韻論的解釈を加える必要がある。何故ならば「丑」は中古徹母で、「好」「𠄎」「𠄎」は中古曉母であるから声母が全く合わないからである。原則として、声母が合わなければ諧声関係は成り立たないからである。これ

9 「𠄎」は『広韻』「好」の小韻に所属するから、「好」「𠄎」は中古で同音である（去声は「呼道切」）。

に関しては第2章以降で述べたい。

2. 「𠂔」 と 「好」 の関係——無声鼻音再構から——

前項で「𠂔」と「𠂔」は「丑声」の形声文字と結論付けたが、すでに述べた通り、ここで問題となるのが「丑」の声母である。「丑」が中古で徹母に読まれることは切韻系の韻書等でも明らかである。一方で、「丑」を声符に持つ「𠂔」「𠂔」は『玉篇』等の反切（呼道切）や「好」と異体字の関係にあるということからも中古音で曉母に読まれるのは確実である。このように中古徹母と中古曉母とでは声母が全く異なるため、そもそも上古での諧声関係を認めることができない。この声母の問題に納得のいく解釈を与えなければ「𠂔」と「𠂔」が丑声の形声文字であることも、上古で「好」と同音であるということも認めることはできないのである（この点を季旭昇2004等は明らかにしていない）。

そこで以下では、中古徹母「丑」と中古曉母「𠂔」「𠂔」「好」の音の由来とその音変化を明らかにしたい。

2-1. 上古音体系への無声鼻音再構

中古徹母「丑」と中古曉母「𠂔」「𠂔」「好」の音の由来とその音変化を明らかにする前に、上古音声母体系における無声鼻音の再構について簡単にまとめておきたい。音韻を論ずる際にはある程度体系的な視点から概観する必要があると考えるからである。

近年、上古音研究者の多くが上古音の声母体系に無声鼻音を再構する。その論拠となるのが以下に挙げるような諧声関係である：

〈明母と曉母の諧声関係〉

	呉音 / 漢音		呉音 / 漢音
「每」(明母)	マイ / バイ	:	「海」(曉母) カイ
「墨」(明母)	モク / ボク	:	「黒」(曉母) コク

このような中古明母 /m/ と中古曉母 /x/ (或いは /h/) の諧声関係は通用可能範囲を大きく逸脱していると言える¹⁰。したがって Karlgren1954 は中古で曉母となる「海」「黒」に複声母 *xm- を再構したが、これは解釈し得ずして生まれた窮余の一策に過ぎないと指摘される¹¹。董同龢 1944 : 12-14 はこの諧声関係を説明すべく上古に無声鼻音 [m̥] を再構し、*m̥->x- というような音変化を推定した。つまり中古で明母に読まれる「每」には *m- を再構し、中古で曉母に読まれる「海」にはその音変化を考慮し *m̥- を再構したのである。こうすることで明母と曉母の諧声関係を説明することが可能となった。

10 通用可能範囲については李方桂 1971 : 8、古屋昭弘 2008 : 211-228 等に詳しい。声母の後に示した音価は中古音価である。

11 例えば董同龢 1944 : 12-13 は「他这种做法自然算不得问题的正式回答，只可以说他在表示有那么一层关系而已」等と指摘している。

以下は主な研究者の再構音である：

Karlgren	董同龢	Yakhontov	Pullyblank	李方桂	Baxter	鄭張尚芳
*xm	*m̥-	*sm-	*mh-	*hm-	*hm-	*hm-
複声母	無声鼻音	複声母	無声鼻音	無声鼻音	無声鼻音	複声母

無声鼻音を再構するのは董同龢 1944、Pullyblank 1962、李方桂 1971、Baxter 1992 である。一方、複声母を再構するのは Karlgren 1954、Yakhontov 1960、鄭張尚芳 2003 である。ただし、Yakhontov 1960 の *sm- は親族言語との比較を基礎にして再構されたものであって、Karlgren 1954 の *xm- とは本質的に異なることに注意されたい¹²。その上で Yakhontov 1960 は *sm- > x^wm- > x^(w) という音変化を推定している。また鄭張尚芳 2003 もここで挙げた複声母の *hm- だけでなく無声鼻音 *mh-[m̥] も再構しており Karlgren 1954 の *xm- という考えとはやはり異なる（この点に関しては後述する）。Pullyblank 1962 は *mh- と表記するが本質的には李方桂 1971 や Baxter 1992 の *hm- と同じことである。いずれにしても、現在では明母 /m/ と曉母 /x/（或いは /h/）の諧声関係に無声鼻音を再構する仮説は多くの研究者の支持を得ていると言えよう。その一方で、現代中国語や中古音体系からすると、このような再構音は信じ難いとする研究者もあるが類型論的には何ら問題ないだろう。

このように董同龢 1944 は無声鼻音再構の嚆矢的存在であるが、その体系は整合性を欠いていると評価される。それは以下のような諧声関係が見えることに因る：

〈疑母と曉母の諧声関係〉

	呉音 / 漢音		呉音 / 漢音
「午」(疑母)	ゴ	:	「許」(曉母) コ / キョ
「義」(疑母)	ギ	:	「儀」(曉母) キ

このように実際には曉母 /x/（或いは /h/）は明母 /m/ だけでなく疑母 /ŋ/ とともに諧声関係を持っているが、董同龢 1944 はこの諧声関係については無声鼻音を再構していない。現在ではこの諧声関係にも無声鼻音 [ŋ̥] を再構することが広く認められている（「午」*ŋ- > ŋ̥-、「許」*ŋ̥- > x-）。：

董同龢	Yakhontov	Pullyblank	李方桂	Baxter	鄭張尚芳
—	*sŋ-	*ŋh-	*hŋg-	*hŋg-	*hŋ-
—	複声母	無声鼻音	無声鼻音	無声鼻音	複声母

Yakhontov 1960 と鄭張尚芳 2003 が複声母とする点に注意されたい。

以下は泥母 /n/ と曉母 /x/（或いは /h/）の諧声関係である。鼻音である明母 /m/ と疑母 /ŋ/ がともに曉母 /x/（或いは /h/）と諧声関係にあるのと並行して泥母 /n/ もまた曉

12 Yakhontov 1960 については雅洪托夫 1986 : 42-52 を参照した。

母 /x/ (或いは /h/) と諧声関係にある¹³ :

〈泥母と曉母の諧声関係〉

呉音 / 漢音
 「難」(泥母) ナン / ダン : 「漢」(曉母) カン

このように泥母 /n/ と曉母 /x/ (或いは /h/) が諧声関係にあるから、明母 /m/ や疑母 /ŋ/ と同じようにここにも無声鼻音 [ŋ̥] を再構し、*hn->x- という音変化を推定すべきように思えるのだが、多くの研究者がこれを認めない。以下の通りである :

董同龢	Yakhontov	Pullyblank	李方桂	Baxter	鄭張尚芳
—	—	—	—	—	*hn-
—	—	—	—	—	複声母

泥母と曉母の諧声関係を認め、「難」を *n- と再構し、「漢」を *hn- と再構するのは鄭張尚芳 2003 のみである(「難」*n->n-, 「漢」*hn->x-)。ただし、明母と疑母の例と同様に鄭張尚芳 2003 は無声鼻音ではなく複声母と考えていることに注意されたい。

では他の研究者はどうするかというと、李方桂 1971 等は以下のような諧声関係に無声鼻音 [ŋ̥] を認める :

〈泥母と透母の諧声関係〉

呉音 / 漢音
 「難」(泥母) ナン / ダン : 「攤」(透母) タン

このような泥母 /n/ と透母 /th/ の諧声関係に無声鼻音 [ŋ̥] を最初認めたのが李方桂 1971 である。李方桂 1971 : 14-15 はミャオ語で [ŋ̥] が [ŋ̥th] に聞こえることを根拠の一つに挙げ、*hn->hnth->th- という音変化を推定している¹⁴。そこで「難」を *n- と再構し、「攤」を *hn- と再構する(「難」*n->n-, 「攤」*hn->th-)。他の研究者の再構音は以下の通り :

董同龢	Yakhontov	Pullyblank	李方桂	Baxter	鄭張尚芳
—	*sn	*nh-	*hn-	*hn-	*nh-
—	複声母	無声鼻音	無声鼻音	無声鼻音	無声鼻音

このように多くの研究者が泥母と透母の関係に無声鼻音を再構していることが分かる。唯一、鄭張尚芳 2003 のみが泥母と曉母の諧声関係と、泥母と透母の諧声関係の二種

13 「漢」の声符については様々な議論があったが、『上博楚簡(一)』「孔子詩論」に於いて「𠄎」に作る字が見え(「水」と「難」に作る)、「漢水」の「漢」を指すことから「漢」の声符を「難」と見て問題ないだろう。

14 李方桂 1971 : 14 「我在貴州調查黑苗的語言的時候，就發現他們的清鼻音 n̥ 聽起來很像是 nth̥，因此我們也可以想像 *hn̥ 變為 *hnth̥，再變為 th̥ 的可能 …」。

(*hn-と*nh-)を認めている。ただし、鄭張尚芳 2003は前者を複声母とするのに対して、後者については無声鼻音とすることに注意されたい。以上をまとめると以下の通りである：

	明曉	疑曉	泥曉	泥透	
董同龢	m				無声鼻音
Yakhontov	sm	sŋ		sn	複声母
Pulleyblank	mh	ŋh		nh	無声鼻音
李方桂	hm	hng		hn	無声鼻音
Baxter	hm	hng		hn	無声鼻音
鄭張尚芳	hm	hŋ	hn	nh	hm, hŋ, hn, →複声母、nh- →無声鼻音

鄭張尚芳 2003 は泥母と透母の諧声関係に無声鼻音 *nh-[ŋ] を認め（鄭張尚芳はこれを基本声母に含める）、泥母と曉母の諧声関係には *hn- (h- 冠音の複声母とする) を再構している¹⁵。こうすることで上古泥母の曉母と透母への音変化を説明することができると考えている。

注 13 でも示したように、『上博楚簡』「孔子詩論」等に「𣪠」（「水」と「難」に作る）が見え、これが「漢水」の「漢」を表すことから、「難」と中古曉母「漢」が諧声関係にあることは確実である。またその一方で「難」は中古透母「攤」とも諧声関係にある。したがって、本稿では鄭張尚芳 2003 の再構音と同様に泥母と曉母の諧声関係(*hn->x-)と泥母と透母の諧声関係 (*nh->th-) の二種を認めることとする：

音変化	例	
*hm->x-	： 「海」（声符「每」*m-）	明母と曉母の関係
*hng->x-	： 「許」（声符「午」*ŋ-）	疑母と曉母の関係
*hn->x-	： 「漢」（声符「難」*n-）	泥母と曉母の関係
*nh->th-	： 「攤」（声符「難」*n-）	泥母と透母の関係

ただし、*hn-（鄭張尚芳 2003 の複声母）と *nh-（鄭張尚芳 2003 の無声鼻音）が音声的にいかなる区別を有していたかについては、有効な回答を持ち合わせていない。一つの可能性として、方言による差異等も考えられるかもしれない。藤堂明保 1957：306-307 は明母と曉母の諧声関係に関して、次のように述べている：

思うに上古の /m/ と /h/ は複声母ではなしに、恐らく /m/ の方言的ななまり、すなわち無声の m̥ が [h̥] となったのではあるまいか。前漢の揚雄の「方言」をみると、「火」・「燬」/h-/ のことを齊の方言では焜 /m-/ と言ったことがみえる。思うに火・燬・

15 鄭張尚芳 2003 は *mh->ph-（滂母）、ŋh->kh-（溪母）等の音変化も考えるが本稿では扱わないため表には加えていない。

焜は同一の語源に由来するもので **/mwər/* が上古のある方言で *[h̥wər]* と発音せられ、ついに **/hwar/* ということばとして雅言のうちに借用されたものであろう。従って上古の複聲母として **/hm/* を認めるには當るまいと考えられる。

このように藤堂明保 1957 は明母と曉母の諧声関係に関して、「方言的ななまり」の可能性を指摘している。この指摘は karlgren の再構音 (**xm-*) に対する反駁であり、本稿での **hn-* や *nh-* とは直接関係しないが、「方言的ななまり」という指摘は大変示唆的である。

実際の音価がどうであれ、上に示した諧声関係と出土資料の状況等 (劉「漢」) を踏まえれば、泥母が曉母と透母のいずれにも関連することは確実であるから、少なくともその区別は認める必要がある。

2-2. 丑声字と無声鼻音再構 (**hn-*, **nh-*)

次に丑声字の幾つかを例に挙げ見ていきたい。無声鼻音の解釈を丑声字に加える前に、まずは「丑」と丑声字の中古音韻地位を確認しておきたい：

- a. 「丑」：流攝尤韻三等開口上声徹母
- b. 「紐」：流攝尤韻三等開口上声娘母
- c. 「𪛗」：流攝尤韻三等開口上声娘母
- d. 「鈕」：流攝尤韻三等開口上声娘母
- e. 「𪛘」：流攝尤韻三等開口上声日母
- f. 「羞」：流攝尤韻三等開口平声心母

韻部に関しては、全て上古幽部開口に所属するから問題ないが、声母はそれぞれ徹母、娘母、日母、心母となる。いま声母を軸にして分類すると以下ようになる：

- 【徹母】： a. (「丑」)
- 【娘母】： b~d. (「紐」「𪛗」「鈕」)
- 【日母】： e. (「𪛘」)
- 【心母】： f. (「羞」)

娘母と日母と諧声関係があることから、徹母と心母は上古 **n-* から音変化したと推測するのが適当だろう (**t->n-* や **s->n-* というような変化は考え難い。呉語の一部で端母が [l] や [n] に読まれる例もあるが少数に限られる)。そこで中古徹母への音変化を考慮し、前項で述べた無声鼻音 **nh-* を「丑」に再構する¹⁶：

16 透母への音変化は **nh->th-* であるが、ここでは徹母であるから **-rj-* を再構する。ただし、Li Fang-kuei 1945: 333-342 によるとタイ語における漢語借用語「丑」は **pl-* と再構される。またチワン語やミャオ語等では「丑」[tsau], [tshau], [t̪chau], [cu], [no] 等が見え (羅黎明主編 2008: 53)、いずれも **n-* から音変化したと推定される (ただし **p-* に由来すると思われる例も幾つか見える)。同源語か借用語かという問題があるが、それにつ

徹母への音変化 (a) : *nhrij->trhj-

その他の音変化は以下の通り¹⁷ :

娘母への音変化 (b~d) : *nrj->nrj-

日母への音変化 (e) : *nj->nj-

心母への音変化 (f) : *snj->sj-

このように丑声字はいずれも上古の鼻音 *n- に由来し、「丑」は中古で徹母であるから無声鼻音 *nhrij- が再構される。

そこで、いま思い出したいのが「𠄎」「𠄏」の二字である。上述したように、本稿では当該二字を丑声の形声文字と考えている。したがって「𠄎」「𠄏」の上古音価とその音変化も考えねばならない。『玉篇』等によると「𠄎」「𠄏」二字は中古で曉母に読まれるから、ここでは *nh- ではなく *hn- を再構する :

曉母への変化 (「𠄎」「𠄏」) : *hn->x-

このように上古音声母体系に *nh- と *hn- の二種を再構することで、鼻音 *n- に由来する「丑」が中古で徹母に読まれることも「𠄎」「𠄏」が中古で曉母に読まれることも説明することが可能となった。つまり「𠄎」「𠄏」が丑声の形声文字であることも認められるのである。

2-3. 「好」の字音について

では「好」の字音はどのように再構すべきだろうか。「好」は会意字であるから諧声系列上では何の手がかりも無いため、中古音音価を頼りに *x- と再構せざるを得ない。実際に、上古音研究者の大部分が「好」字を *x- 或いは *h- と再構している。しかし、伝世文献や出土資料で明らかのように「好」と「𠄎」「𠄏」は異体字の関係——すなわち異形同音同義語——であるから、中古に限らず上古でも同音でなければならない。したがって、本稿では「好」も鼻音 *n- に由来すると考え、*hn- と再構する¹⁸。「丑」と

いては稿を改めたい。本稿では漢語内部の状況を重視し、「丑」は *n- に由来すると考える。
17 「羞」については s-prefix を認め心母への音変化を説明する。ここで *s-prefix を認めるため、上述した Yakhontov1960 のように鼻音と曉母の關係に *sm-, *sn- 等を認めることはできない。もちろん上古音以前——すなわちシナ・チベット祖語——の段階では *s-prefix 等を認める必要があるかもしれないが、この段階では認められない。仮に認めるとすると、中古で心母に読まれる「羞」と中古で徹母に読まれる「丑」のいずれもが *sn- となってしまうからである。ただし、「羞」が形声字かどうかについては更なる議論が必要であり、仮に「羞」が丑声でないとするれば、ここに *s-prefix を再構する必要はない。

18 Baxter2005 も同様に「好」を *hn- と再構するが、Sagart&Baxter2009: 221-244 ではこれを改め *q^{hc}u²と再構する。本稿は実際に出土した楚簡で「好」と「𠄎」が関連することを重視し、「好」を *hn- と再構する。

「丑」「好」の関係は以下の通りである：

「丑」	：	*nhrij->trhj-	(中古徹母)	—	諧声関係
「𠂔」	：	*hn->x-	(中古曉母)		
「好」	：	*hn->x-	(中古曉母)	—	異体字

3. 「丑」の単語家族

「丑声」の「𠂔」「𠂔」と「好」の字音に関しては上述したように鼻音 *n- に由来すると見て良いだろう。では、丑声の文字は一体どのような語義を持っているのだろうか。同じ声符を持つ以上、ある程度近似した意味を持つであろうことは容易に推察される¹⁹。丑声の文字を見てみると、「手」に関する意味を持つ語彙が多いようである。以下は『説文』の説解である（括弧内は段注。一部分のみ挙げる）：

「丑」：「紐也（積名曰、丑、紐也）。十二月万物動用事。象手之形（人於是挙手有為。又者、手也）。日加丑。亦挙手時也。凡丑之属皆从丑。」²⁰

「紐」：「系也（係也。係者、結束也）。一曰結而可解（結者、締也。締者、結不解也。其可解者、紐也）。」

「脛」：「食肉也（食肉必用手。故从丑肉）。从丑肉。丑亦声。」

「鈕」：「印鼻也。」

「粗」：「裸飯也（食部曰、飣、裸飯也。広韻曰、飣亦作粗）。从米丑声。」

「羞」：「進献也。从羊丑。羊所進也（从丑者、謂手持以進也）。丑亦声。」

以下は藤堂明保『漢字語源辞典』の解釈である：

「丑」：「原義は手でしめつけてにぎること。手と同系のコトバ。のち肘とも書き、物をしめつける役目をするヒジの意となる。」

「紐」：「糸ひもなり。一にいわく結んで解くべきもの。糸+丑声。」（『説文』説解のみ収める）

「脛」：「肉と同系のコトバ。」

「鈕」：未収

「粗」：未収

「羞」：「「羊+丑の会意」で、羊肉を手で細かくしめる意を表したものの。」

19 例えば『段注』一上四bの「禛」の注に「聲與義同原。故諧聲之偏旁多與字義相近」（声と義は同源である。したがって諧声の偏旁は字義と近いことがある）とある。詳細は説文会編『説文入門』p131を参照されたい。この他、藤堂明保『漢字語源辞典』の項目内を見ると、多くの場合、同じ諧声符の文字は同じグループに所属する傾向にある。

20 「丑」は甲骨文ですでに地支として現れるが、本来は「手」或いは「ひも」の意味であったと予想される（『甲骨文字典』pp. 1583-1584、『金文編』p. 990参照）。

以下は白川静『字統』の解釈である：

「丑」：「手の指先に力を入れて、強くものを執る形。又（手）の字形の、爪を立てている形である。」

「紐」：「丑は指先に力を入れて、強くものを執る形。『説文』「系なり…」とあり、組み紐をいう。印のつまみに紐を通して用いるので、つまみを紐・鈕といい、その飾りによって亀紐・獸紐という。」

「𠂔」：未収

「鈕」：「丑は指先に力を入れて、強くものを執る形。鈕とは器物の蓋や印璽などの、つまむところをいう。」

「𠂔」：未収

「羞」：「丑は指に力を入れてもつ形。羊肉を祭事に羞めるをいう。」

原義を定めることは決して容易ではないが、これらの文字が諧声符「丑」を持つこと、『説文』の説解、段注の解釈、藤堂明保 1965、白川静 1985 の解釈を帰納すると、丑声字の多くが「手」と関連する原義を持つと見て良いだろう²¹。

では、同じく丑声字である「𠂔」は一体どのような意味を持っているのだろうか。「𠂔」の字形から考えると、「手で子を抱く」というような意味を持つと推測することができるのではないだろうか。そこでいま思い出したいのが、藤堂明保『漢字語源辞典』と白川静『字統』に見える「好」に関する見解である：

藤堂明保『漢字語源辞典』：

「女+子（こども）」の会意字で、女性が子供を大切に**か**ばって**か**わいがるさまを示す。だいじにして**か**わいがる意を含む。

白川静『字統』：

会意字…ト文に女を母の形に作り、あるいは子を抱く形に作るもの**が**あって、婦人がその子女を愛好することを示す字である。

藤堂明保、白川静両氏のいずれもが「好」を「女性が子を抱く」形であるとしており、これは「𠂔」の字形とそこから帰納される語義「手で子を抱く」と非常に似ている。またすでに述べた通り「丑声」の文字（「紐」等）と「𠂔」「好」はいずれも鼻音 *n- に由来し、上古では同音或いは類音であったと考えられる。したがって本稿は「𠂔」を含む丑声字と「好」を同じ単語家族に所属するものとする。またこの単語家族の語基を {NU} とし、基本義を「手で持つ、或いは抱く（手に関する意味）」と定める。次の通りである：

21 当然のことながらすべての丑声字が「手」に関係するとは限らない。

〈語基 {NU} の単語家族表〉²²

透 nh-	徹 nhrj-	泥 n-	娘 nrj-	日 nj-	心 snj-	書 hnj-	曉 hn-	基本義：「手」で何かを持つ等の「手」に関する意味	
	丑		紐	粗	羞	手	𠄎		
								曉 hn-	「女性が子を大事に抱く」 （『漢字語源辞典』『字統』）
								好	

中古で書母に読まれる「手」もこの単語家族に含まれる可能性が高い。通常、諧声系列上では「手」の字音を明らかにできないため、Baxter1992等も *hj- と再構するにとどまるが、本稿では王力 1982 : 231 に従い「手」も「丑」と同じ単語家族に所属するものと認める。また、その字音については鼻音 *n- に由来するものとする²³。「手」の再構音は中古書母への音変化を考え *hnj- とする²⁴。

さらに興味深いのが「羞」である。甲骨や金文を見てみると、「羞」は「羊」と「又」に従う字に作られ、「丑」に従う字には作られない。したがって「羞」を丑声字と認めることはできそうにない。ところが「羞」の字形を見ると「羊」を「手」で持つように表記され、これを『甲骨文字典』は「羊を手を持ち、捧げる様」としており、丑声字や「好」の語義と大変似ている。本稿ではその点を考慮し、「羞」も同じ単語家族に含めた²⁵。これを論証するためには *s-prefix を認める等の音韻論的解釈が求められるが、この点に関しては稿を改めたい。

また「肘」について、藤堂明保『漢字語源辞典』は「丑」や「手」等と同じ単語家族とする。白川静『字統』も「肘」の「寸」を「おそらく丑の省略形であろう」として「丑」との関係指摘する。そうしてみると「肘」も「丑」や「手」と同じ単語家族に所属するものと考えられそうであるが、これについては否定的にならざるを得ない。なぜならば上述の単語家族の語彙が鼻音 *n- に由来するのに対して「肘」は中古知母であり、鼻音 *n- に由来するとは到底考えられないからである。上に挙げた〈語基 {NU} の単語家族表〉を参照されたい。原則として、語基 {NU} の語は中古端母、知母とは関連しないのである。

22 透母や泥母に語彙が現れないのは、丑声字のほとんどが中古音三等韻字であるからである。理論的には透母や泥母にも語彙が表れると考えて良い。

23 王力 1982 : 231 では「𠄎」と「𠄎」が異文関係にあること等を根拠とする。Sagart1999: 155-156 も「手」を鼻音に再構する。

24 「手」は鼻音由来 *hnj- であり、「首」は L-type 由来 *hlj- である。この二字は上古では起源を異にするけれども、中古ではいずれも書母に読まれる。少なくとも戦国期には合流しておらず、漢代以降に合流したと考えられる（野原将揮 2009:67-85、2010:69-78 参照）。「首」と「頭」との関係を考える上で「手」の字音とその音変化は大変興味深い。

25 藤堂明保『漢字語源辞典』では「羞」を「修」等と同じ単語家族（藤堂 1965:209-212 {TSOG TSOK} しぼる、ちぢむ、ほそい）と見做すが、「修」は上古で鼻音でなく L-type に由来する声母であると思われるから、本稿は「羞」を「修」等と同じ単語家族とはしない。

おわりに

本稿は「好」「𠂔」の関係を伝世文献及び戦国楚地出土の楚簡で確認し、上古音研究の立場から考察を加えた。その結果、「𠂔」と「好」が異体字——すなわち異形同音同義語——の関係であること、「𠂔」「𠂔」が丑声の形声文字であること、さらには「好」が鼻音 *n- に由来すること、そして「好」「𠂔」「𠂔」と丑声の文字の一部が同じ単語家族に所属することが明らかとなった。この単語家族には、「手」等も所属すると考えられる。またこれまで「肘」も「丑」や「手」と同じ単語家族に所属するとされてきたが、本稿は丑声字や「手」が鼻音 *n- に由来するのに対して、「肘」は中古知母に由来することから、「肘」は同じ単語家族に所属しないと結論付けた。

音韻面では、上古 *n- が中古透母 /th/ だけでなく中古曉母 /x/ へも音変化することを確認することができた（「丑」*nhrij->trhj-、「𠂔」*hn->x-）。李方桂 1971 や Baxter 1992 等は泥母と透母の諧声関係は認めるものの泥母と曉母の諧声関係については不問に付している。しかしながら「紐」（娘母）のような鼻音 *n- に由来する語彙と中古徹母「丑」や中古曉母「𠂔」が諧声関係にあることを勘案すると、鼻音 *n- が中古透母（徹母）だけでなく中古曉母へも変化するという仮説は認められるべきである。この他にも、例えば出土資料中で「𠂔」（「水」と「難」に作る）が「漢水」の「漢」（中古曉母）を表すことも泥母と曉母の諧声関係を認める根拠の一つとなる。ただし鄭張尚芳 2003 のように中古曉母へと音変化する *hn- と中古透母へと音変化する *nh- を一つの声母体系に同時期或いは同地域に再構できるかどうかについては、いま有効な回答を持ち合わせていない。一つの可能性として方言の差異、時間的差異ということも考えられよう。今後の出土資料の研究によってこういった問題も明らかにできるかもしれない。

周知の如く、中国語音韻史の研究にとって漢字の研究は必要不可欠である。それと同様に漢字の研究にとっても音韻論的な研究は必要不可欠である。これは漢字の凡そ 8 割が形声文字であるということからも明らかである。冒頭でも述べたように、同じ単語家族に所属する文字が必ずしも同じ声符を持つ文字に限られるというわけではない。異なる声符を持つ文字でも同じ単語家族に所属することがあり得るのである。いま仮に漢字を表層と見るならば、その深層には必ず言語があり、表層——すなわち字形上——で関連のないものが、深層——すなわち音声——で繋がっていることがしばしばある。しかしながら表層で関連性が無いような場合には深層にある関係性を見出せないことが少なくない。本稿で扱った丑声の「𠂔」と「好」「手」の関係がまさにそれであり、形・音・義のうち形のみ大きく異なる例である²⁶。また上古音研究の進歩とともに、これまで認められてきた単語家族の枠組み及びそれに所属する語彙について再考しなければならないこともあるだろう。本稿で例として挙げた「肘」等がそれである。いずれにしても単語家族の研究を進めることは上古中国語だけでなく、系統関係を考える上でも大変重要なことであって、これを進めるためには伝世文献だけでなく実際に出土した出土資料を扱い、上古音研究の立場から漢字とその言語について考察を加えることが必要である。

26 伝統的な概念である形・音・義と語との関係については大西克也 2009 : 1-3 に詳しい。

《参照文献》

【中国語】

- 董同龢1944. 『上古音韻表稿』中央研究院歷史語言研究所
- 馮勝君2007. 『郭店簡與上博簡對比研究』綫裝書局
- 季旭昇主編2004. 『《上海博物館藏戰國楚竹書（一）》讀本』台北：萬卷樓
- 李方桂1971. 「上古音研究」, 『清華學報』1, 2: 1-61
- 羅黎明主編2008. 『广西民族语言方音词汇』北京：民族出版社
- 馬承源編2001. 『上海博物館藏戰國楚竹書（一）』上海：上海古籍出版社
- 容庚編1985. 『金文編』北京：中華書局
- 王力1982. 『同源辭典』商務印書館
- 謝·叶·雅洪托夫著 唐作藩 胡双宝編1986. 『汉语史論集』北京大學出版社
- 荊門市博物館1998. 『郭店楚墓竹簡』文物出版社
- 徐中舒2006. 『甲骨文字典』成都：四川辭書出版社
- 野原將揮2010. 「試論《郭店楚簡》聲母系統」, 遠藤光暁・田口善久編『上古漢語與漢藏語論文集』: 69-78頁, 東京：東歐亞大陸語言研究會 (In Mitsuaki Endo & Yoshihisa Taguchi (eds.), *Papers in Old Chinese and Sino-Tibetan Linguistics Circle for the Study of Eastern Eurasian Languages*, Tokyo.)
- 臧克和1999. 『尚書文字校詁』上海：上海教育出版社
- 鄭張尚芳2003. 《上古音系》上海：上海教育出版社

【日本語】

- 大西克也 宮本徹2009. 『アジアと漢字文化』放送大學教育振興會
- 白川靜1984. 『字統』平凡社
- 藤堂明保1957. 『中国語音韻論』江南書院
- 藤堂明保1965. 『漢字語源事典』學燈社
- 藤堂明保1987. 「形態基という考え方」, 『藤堂明保中国語學論集』pp. 232-241 汲古書院
- 野原將揮2008. 「好𠄎字考」, 『早稲田大學大學院文學研究科紀要』54: 243-256頁
- 野原將揮2009. 「上古中国語音韻體系に於けるT-type/L-type 声母について——楚地出土竹簡を中心に——」, 『中国語學』256: 67-85頁
- 服部四郎1999. 『日本語の系統』岩波書店
- 古屋昭弘2008. 「上古音の開合と戦国楚簡の通仮例」, 『早稲田大學大學院文學研究科紀要』54: 211-228頁
- 頼惟勤監修 説文會編1983. 『説文入門』大修館書店

【欧文】

- Baxter, William H. 1992. *A Handbook of Old Chinese Phonology*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Baxter, W. H. 2005. 出土文献和上古汉语的构拟, Chicago, May 2005; Shanghai Normal University, 12 Dec 2005.
- Karlgren, B. 1933 Word Families in Chinese. *Bulletin the Museum of Far Easter Antiquities* 5: 9-

- Karlgren, B. 1954. Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese. *Bulletin of the Museum of FAR Antiquities* 26: 211–367.
- Li Fang-kuei 1945. Some Old Chinese Loan Words in The Tai Languages. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 8–3: 333–342.
- Pulleyblank, E. G. 1962. The Consonantal System of Old Chinese. *Asia Major* 9: 58–114.
- Sagart, L. 1999. *THE ROOTS OF OLD CHINESE*. Amsterdam: John Benjamins.
- Sagart, L. and Baxter, William H. 2009. Reconstructing Old Chinese uvulars in the Baxter-Sagart system (Version 0.99). *Cahiers de Linguistique Asie Orientale* 38–2: 221–244.